

デザイナー 20 人が東京オリンピックについて公開スピーチ 「東京デザイン 2020 オープンセッション」を 10 月 31 日緊急開催

2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市が東京に決定したことをうけ、公益財団法人日本デザイン振興会、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会、公益社団法人日本インダストリアルデザイナー協会、公益社団法人日本サインデザイン協会、日本デザイン学会の 5 機関が中心となり「東京大会デザイン 2020 フォーラム (仮称)」の設置を予定しています。

その準備の一環として、様々な領域の最前線で活躍するデザイナーなど 20 名が集結し、オリンピックについて語る「東京デザイン 2020 オープンセッション」を、10 月 31 日に緊急開催することになりました。

当日は、オリンピックのシンボルマークをはじめとする、ポスターやピクトグラム・サインなどのコミュニケーションのデザインや、聖火トーチやメダルなどのプロダクトデザイン、都市計画に関するデザイン、次世代のモビリティや情報通信のデザイン、またパラリンピック大会におけるデザインの役割、さらに東京のブランディングや日本のデザイン文化力の発信方法などについて、20 人が多面的なスピーチを行う予定です。

今後は、当日の参加者からの意見をもとに、シンボルマークを決定する仕組みづくりや、デザインマネジメントをすすめるための組織づくりへの提言など、活動の指針をまとめていきます。

東京デザイン 2020 オープンセッション ~20 人のデザイナーが 2020 年の東京を語る

日時: 2013 年 10 月 31 日 (木) 19:00-21:00

会場: 東京ミッドタウン・ホール ホール B (東京都港区赤坂 9-7-2 ミッドタウン・イースト B1F)

スピーカー: 浅葉克己 (アートディレクター)、勝井三雄 (グラフィックデザイナー)、定村俊満 (サインデザイナー)、田川欣哉 (デザイン・エンジニア)、田子學 (アートディレクター/デザイナー)、田中一雄 (環境・プロダクトデザイナー)、永井一史 (アートディレクター)、永井一正 (グラフィックデザイナー)、西山浩平 (デザインプロデューサー)、羽藤英二 (交通工学研究者)、原研哉 (デザイナー)、久田邦夫 (アートディレクター)、廣田尚子 (プロダクトデザイナー)、深澤直人 (プロダクトデザイナー)、福島治 (アートディレクター)、松井龍哉 (ロボットデザイナー)、松下計 (アートディレクター)、ムラタ・チアキ (プロダクトデザイナー)、山中敏正 (感性デザイン研究者)、暦本純一 (ヒューマン・コンピュータ・インタラクション研究者) 計 20 人を予定 (※記載は五十音順)

司会: 中谷日出 (映像アートディレクター/NHK 解説委員)

定員: 120 名

参加費: 無料 (本プログラムはグッドデザイン賞受賞展「グッドデザインエキシビション 2013」の特別企画として開催されるため、「グッドデザインエキシビション 2013」への入場券が必要です)

事前申込: 不要 (当日先着順となります。定員を越えた場合は立ち見、あるいは会場に入れない場合があります)

映像配信: ストリーミング中継を実施予定

主催: 東京大会デザイン 2020 フォーラム (仮称)

(公益財団法人日本デザイン振興会、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会、公益社団法人日本インダストリアルデザイナー協会、公益社団法人日本サインデザイン協会、日本デザイン学会 / 2013 年 10 月 23 日現在のメンバー)

※最新情報は、ウェブサイトを更新していきます。 www.tokyo-design2020.jp

一般からのお問い合わせ先 公益財団法人 日本デザイン振興会

電話: 03-6743-3777 info@g-mark.org

報道関係のお問い合わせ先 グッドデザイン賞PR事務局 (共同PR株式会社内) 担当: 渡辺、宇津木、横山

電話: 03-3571-5238 FAX: 03-3571-5380

「いまこそデザインの総力を結集する時」

オリンピックはスポーツの祭典であるとともに、平和と文化の祭典でもあります。その国の文化のレベルを向上させ、その文化の力を通じて、国際社会をさらに豊かなものへ高める大きな機会となります。オリンピックがそのような場であるために、デザインが大切な役割を担います。2020年の東京オリンピック開催を通じて、世界に誇れる日本の文化を示すために、いまこそ日本のデザインの総力を結集しなければなりません。

1964年の東京オリンピックでは、日本のデザインが大きな力を発揮しました。建築・都市計画・グラフィック・インダストリアルなど、さまざまなデザインの精鋭たちが集い、高度成長期にあった当時の日本の国力と結びつき、日本の文化と産業を世界に伍したものに引き上げることに貢献したのです。その時に生み出されたオリンピックのシンボルマークは、オリンピックの象徴にとどまらず、人々を結びつけ、その力を結集させ、人々の意志がつねにそこに立ち返るためのシンボルとなりました。さらに、サインやピクトグラム（図記号）の数々も、その後不断の改良が加えられることで、のちの社会に欠かせないインフラストラクチャーになったのです。

これらの、初代東京オリンピックを通じてもたらされた世界に冠たるデザインのポリシーは、日本の誇る文化遺産であり、日本のアイデンティティとしてさらに発展させていくべきものです。新しい東京でのオリンピックが成功するために、確かなポリシーのもとで、人々の意志を集約させて強力に束ねていくための質の高いデザインが求められています。

初めての東京オリンピックから50年の時を経て、大きく発展した日本のデザインの力をもって、次の新たな時代を築いていく時なのです。

永井一正（公益財団法人日本デザイン振興会 前会長、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会 特別顧問、日本デザインセンター 最高顧問）

「50年後の未来にむけて」

1964年の東京オリンピックで展開されたデザインは、さまざまな人々の気持ちを集め、新しい生活や産業、そして社会を築いていこうとする力を、私たちに与えてくれました。当時は、まだまだ戦争の影が癒えていない時代でした。平和の祭典は、この痛みをぬぐい、新たな飛躍を遂げていく大きな契機となりました。そして、その素晴らしいデザインは、オリンピックを成功に導いた大きな要因となっただけでなく、いわばデザインの力を示す「ひながた」として、それ以降の社会全体の発展を導いていきました。

このオリンピックが、50年余の歳月を経て、また東京で開催されることになりました。日本に新たな飛翔を求める世界中の声、この実現を後押ししてくれたのでしょうか。この期待に応えるためにも、私たちは次世代をリードするデザインを生みださなければなりません。

50年前と比べて、地球は狭くなりました。世の中はより便利にかつ複雑になりました。しかし、争いや差別のない社会を実現しようとするオリンピックの精神は、色褪せるどころか、その重要性をさらに増しているのです。2020年の東京オリンピックのデザインは、この崇高な精神にのっとった社会を実現しようとするメッセージであり、少なくとも次世代を照らす「ひながた」でなければならないはずです。

その実現は、高度に発展を遂げた日本のデザインにとっても、決して容易ではありません。安易な解決を求めた途端、世界の方々の日本への期待は吹き飛んでしまうのです。

そこで、日本デザイン振興会は、さまざまな分野のデザイナーが結集し、デザインを開陳し、その英知を相互に磨き上げていく機会を提唱したいと考えました。まず、日本が築きあげてきたデザイン資産を継承すること。新しい社会環境を踏まえたデザインの活用を導くこと。さらには次世代を示唆するビジョンをつくりあげること。

2020年までの7年間は、ちょうどよい準備期間かもしれません。私たちは、オリンピックのデザインを核に、その力を社会全体の発展へと生かしていく展開を、しっかりとプログラムしていかなければなりません。

川上元美（公益財団法人日本デザイン振興会 会長）